

数十分の出来事

福井県立丹生高等学校 橋谷 啓人

少し肌寒く感じる秋の早朝。

私は、ある地区のマラソン大会に出場することになり、会場に向かって歩いていった。ゼッケンのついたTシャツ一枚に、半ズボンの出で立ち。こんな格好でも、寒さなど全く気にならない。ただひたすら、早歩きをする。

今回は、三十九歳以下男子五キロメートルの部に出場する。

しかし、学校のマラソンや、自主的なトレーニングでは、三キロ程度しか走っていない。そのため、自分の結果が出せるどころか、完走できるかさえも不安に思う。けれども、「ちゃんと練習してきた」という自信だけが、自分の足を前に進める。

やっと会場に着いた。

スタートの時間までは、まだ余裕がある。「少しでも緊張をほぐしたい」と思い、そこらを徘徊することにした。その時だった。「こんにちは！」という声がした。中学生のボランティアが挨拶してくれたのだ。それも、ただ単にしているわけではない。しっかりと目を見て、はっきりと声かけをしているのだ。私は、急いで、「こんにちは」と返した。それから、途中途中、ボランティアとして立っている中学生全員が、とても丁寧で心地よい挨拶をしてくれる。不安と緊張でいっぱいだった私は、少し救われたような気がした。遂に、スタートの時間が迫ってきた。出発地点には、大勢の大人たちがいる。できるだけ前の方へ並び、丹念に準備運動。走る前のルーティンを終えた私は、気持ちを入れて身構えた。とはいえ、スタートの合図が鳴るまでは、緊迫した空気に晒される。一言で言えば、地獄である。勿論、誰かに言われてノコノコと来たわけではない。自分の意思のみで、この場に立っている。

「パン！」と火薬の音が鳴り響いた。一斉に轟く足音の雄叫びに合わせて、私も走り出す。同じ速度で、自分のペースで走り続けることを心がけ、足を前に進める。むやみに飛ばさずに、一定の疲労に耐え続けることを意識し走っていた。

しかし、二キロメートル地点に差し掛かったあたりのことだ。後ろから厳ついとしか言いようがない六十代くらいのおじさんが追い上げてきたのだ。彼は、私を抜こうとした。しかし、私は、「負けるか！」と心で叫び、ペースを上げた。それでも彼は付いてくる。もっと上げてみた。しかし、彼は退かない。

奮闘の末、私は彼と横に並んだ。言うまでもなく、お互いに全力で競っている最中、彼が息切れをしながら言った。「ナイス!」と。私は、「ナイスです」と彼に返しつつ、驚いた。苦痛の絶頂の中で、彼が激励してくれたのだ。一言しか話していないのに、仲良くなれた気がし、とても嬉しく思えた。

それから、彼との奮闘は続いた。必死になって飛ばす私を、全速力で追い抜く彼。抜いたり抜かれたりを何度も繰り返した。私は、彼の根性に驚きながらも、ひたすら飛ばし続けた。

しばらく後、彼が言った。「あと、一キロや!」と。疲労困憊になった私に教えてくれたのだ。私は、とてもありがたく感じ、「はい!」と返事をした。

いよいよ、ゴール付近まで来た。さっきの中学生たちが、「頑張れー!」と叫び、応援してくれていた。そして、外側から抜いていく彼を追いながら、私は、ゴールに突っ込んだ。ゴールした後、私は、彼と熱い握手を交わした。そして、「ありがとうございました!」と言い、その場で別れた。

たった数十分の時間だけで、ものすごく心が和む体験をすることができた。

この日のことを思い出した今、自分のスマートフォンで結果の一覧を見る。私の結果を見た後、彼の結果を調べる。出てきた。そして、私の中に、隠しきれないほどの喜びが湧き上がってきた。彼は、一位だった。